

紙季折々

しき※ありあり

日本製紙グループ

環境・社会コミュニケーション誌

Vol.4

秋



今、生物を守るために何ができるのか。

現在、地球上では多くの生物が絶滅の危機に瀕しています。すでに滅んだ種も多数あり、その絶滅のスピードについては複数の説が存在します。中には「年間4万種」、つまり、13分ごとにひとつの種が絶滅しているというにわかに信じがたい説もあるほど、我々の想像を超えて地球は傷ついています。今、生物を守るために何ができるのか。日本製紙グループの生物多様性への取り組みをご紹介します。



写真:シマフクロウ

北海道全域に住んでいたシマフクロウは今や中央部や東部の一部にしか生息しておらず、その数は約100羽と絶滅の危機にある。日本製紙の社有林もその生息地に含まれ、約13haを保全している上、巣箱を設置している。

「豊かな自然」という言葉から、皆さんはどのような風景を思い浮かべますか？ ライオンやシマウマが走り回るサバンナ。虫取りをした里山。色とりどりの珊瑚や熱帯魚が集まる海。思い浮かべる風景は人それぞれ違うでしょう。このように地球上には、様々な生態系が存在し、そこに多くの生物が生息しています。「生物多様性」(※1)という言葉はまさにその多様性を表しています。しかし、「種の絶滅速度は太古の時代の1000倍」(※2)、「年間4万種が失われている」(※3)といったように多くの説で環境破壊による生物の喪失が示されており、「生物多様性の保全」が急速に求められるようになってきました(コラム1)。

※1 学術的には遺伝子レベルの多様性も考慮に入れますが、一般的には生物多様性とは種の多様性を示します。

※2 Millennium Ecosystem Assessment (MA), 2005

※3 N・マイヤース 「沈みゆく箱舟」, 1991

コラム1 生物多様性をめぐる国際情勢

地球上の生物の多様性を包括的に保全することを目的として、生物多様性条約が1992年、国連の元で採択されました。2006年4月時点で187か国及びECが締結しており、世界各国が一致してこの問題に取り組んでいるのです。なお、日本は1993年に18番目の締約国となり、この条約の発効以来、最大の拠出国(拠出金額は第1位:全体の22%)として、条約実施のために多大な財政的支援を行っています。

この条約上の義務を履行するため、日本は1995年に生物多様性国家戦略を策定、2002年3月の改訂では、里山・干潟等を含めた国土全体の生物多様性の保全、自然再生の推進、多様な主体の参加と連携などの内容を盛り込み、国を挙げて生物多様性の保全に取り組んでいます。

さて、多くの生物が失われていくことの問題は何でしょうか？ まず有用な遺伝子資源・生物資源の喪失が、私たちの子供達そして未来の人類に多くの損失を引き起こすという問題があります。さらに、種の絶滅で食物連鎖の微妙なバランスが崩れることによる生態系システムの崩壊が人類の将来に大きな影を落とす可能性も指摘されています。つまり、現在のつけを将来の世代に払わせてしまう可能性があるのです。それに加え、人類というただひとつの種が数多くの種を絶滅させている、ということの問題とする見方も無視できません。

日本製紙グループでは、このように重要な生物多様性の保全に対応するため、2007年春に環境憲章を改定し「生物多様性と生態系保全に配慮した企業活動を行う」ことを明記しました。今号では当社グループの取り組みをご紹介します。

① 小笠原の自然を守る独自技術

東京から南に1000キロ。自然豊かな小笠原諸島は東洋のガラパゴスといわれるほど貴重な動植物が多い所です。しかし人間の持ち込んだ生物や島の開発により、いくつかの固有種が絶滅に瀕しています。実はその小笠原諸島において日本製紙の独自技術が絶滅危惧種の保全に貢献しています。

植林に適した木を増やす研究の中で確立した独自技術「光独立栄養培養技術」(コラム2)は、植物の「光合成能力」を助け、発根を促します。この技術を利用して絶滅危惧種の苗木を増殖する依頼を、小石川植物園と(社)林木育種協会から受けました。そし



アカガシラカラスバト(右)
発根したオガサワラグワ(下)



このオガサワラグワは同じ絶滅危惧種であるアカガシラカラスバトの餌となる植物のひとつ。これら固有の餌植物の減少もそれを餌とする動物の減少にも影響しているようです。自然のつながりである食物連鎖を考えると、絶滅危惧種の植物を救うことが大変意義深い取り組みであることがわかります。

て、小笠原諸島の固有種で絶滅危惧種1A類に分類されているコバトベラ、オガサワラグワ、セキモンノキなどの増殖に成功し、苗木を小笠原諸島に戻しているのです。

このオガサワラグワは同じ絶滅危惧種であるアカガシラカラスバトの餌となる植物のひとつ。これら固有の餌植物の減少もそれを餌とする動物の減少にも影響しているようです。自然のつながりである食物連鎖を考えると、絶滅危惧種の植物を救うことが大変意義深い取り組みであることがわかります。

② シラネアオイを守る社員の思い

毎年6月中・下旬に紫色の可憐な花を咲かせるシラネアオイ。近年、シカの食害により、その数は群馬県のレッドデータブックの準絶滅危惧種に指定されるほど激減しています。そのため、尾瀬高等学校と地元の片品村を中心とした「シラネアオイを守る会」が2000年12月に発足され、種子の採取、育苗、植栽のほか、保護柵の設置や山の清掃活動などを行っており、2006年10月には群馬県の環境賞を受賞しました。

日本製紙グループでは、シラネアオイの植栽地として菅沼社有林(群馬県利根郡片品村)を提供し、2002年から有志社員が「シラネアオイを守る会」の活動にボランティアとして参加しています。20



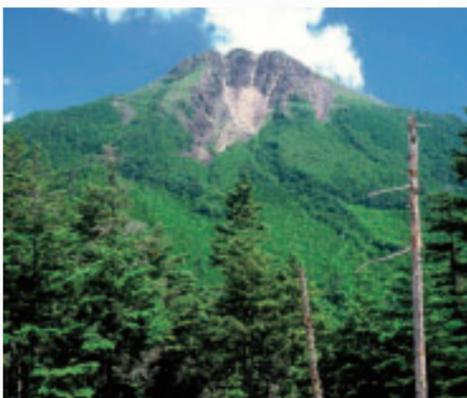
シラネアオイ(写真右)の植栽風景

07年9月13日にも「シラネアオイを守る会」の活動が、晴天の日光白根山にて行われました。当社グループからは24人の社員が参加し、尾瀬高校の生徒さんと標高2000メートルを超える弥陀ヶ池の周辺や、登山道で清掃活動を行いました。尾瀬高校をはじめ地域の皆さんとの交流を深めながら、シラネアオイが一面に咲き誇る日を夢見ています。

③ 豊かな森を守る責任

日本製紙グループは、かつてより製紙原料確保を目的として国内に広大な森林を所有してきました。現在では、国内社有林9万ha、海外社有林17万haの計26万ha(東京都の1.2倍)の森林を所有・管理し、紙の原料であり生物の宝庫でもある森林と大変関わりの深い企業といえます。

当社グループにとって、森林は重要な原料調達の間でもありますが、森林経営に携わる企業として豊かな森林を守る社会的責任があります。当社グループでは、生物多様性と社会環境に配慮した森林管理を行っている証である森林認証を国内・国外すべての社有林において2008年度までに取得することを目標とし、国内社有林ですですにその取得を完了しています。



日光白根山(2,578m)
関東以北の最高峰であり百名山に数えられる日光白根山。山頂を含めた群馬県側には日本製紙グループの社有林が広がっています。シラネアオイの植栽活動もこの山で行われています。

また、国内社有林の約20%において、木材生産目的の伐採を禁止して地域の生態系や水源涵養などの環境機能を保全する環境林分と設定しています。環境林分のなかには、阿寒や日光など国立公園に指定されている森林もあり、そこには豊かな自然が広がり、多くの生物の営みの場となっています。

今号では生物多様性を保全するための3つの取り組みをご紹介します。しかし自然は身近な存在であり、広い意味で生物多様性を守っていくためにできることはたくさんあります。工場から排出する水をできるだけきれいに自然に返すこと、森林の適切な維持を通して水を浄化すること、温室効果ガスの排出を減らし地球温暖化問題に対応することなども生物にとつて非常に重要なことです。

日本製紙グループでは環境への負荷を減らし、この美しい地球を未来に残す努力を続けていきます。やるべきこと、また今できることはまだまだあります。皆さんと一緒に、未来への歩みを進めていきたいと考えています。

コラム2 光独立栄養培養技術の活用

通常、挿し木では難しいといわれている桜や梅、りんごといったバラ科の植物の発根。当社の独自技術「光独立栄養培養技術」は、植物の持つ光合成能力を最大限に発揮させる環境を整え、これらのバラ科の植物でも発根を促し挿し木で苗が作れることが特長です。日本製紙では、この技術を用い、バラ科の植物以外にもお茶、果樹などの苗木を生産、販売するアグリ事業を行っています。

また、春、私たちを楽しませてくれる桜の木にも、この技術は利用されています。日本各地には、言い伝えが残っているような歴史的な桜あるいは神社の銘木が存在しますが、中には寿命などにより枯れかけているものもあります。日本製紙では、そのように歴史的・学術的価値の高い桜の保護活動も行っています。



枝を節ごとに切り分け、発根床に挿し穂を挿す



光と炭酸ガスを制御し、発根を促進する



旺盛な根の発達が見られる



発根した苗を育て開花へ(例 笹部桜)

木をもっと深く理解していく時代がきてるなと思います。

作家、『本の雑誌』編集長、そして映画監督としても活躍している椎名誠さん。

世界中を旅する中で感じ、考えたことについて語っていただきました。

一昨年、集中して北極圏へ行っていた時に、「森林限界」という意味がかなりわかってきたんです。それまでは一定の高度を超えると樹木は育たないと理解していたんですが、北極圏に行って地球規模で森林に限界があるということを知りました。パタゴニア・エリアを中心に南方の極限地帯をすいぶん旅して、南極に草木がないことは目の当たりにしていましたが、北極にも当然ないんですね。

アラスカの人は、主食のアザラシを生で食べています。どうしてかと言えば、焼きたくても、燃料になる木がないからなんです。クジラとかセイウチの脂を搾って、それを熱源にすることができるけど、せいぜい灯火に使うぐらいしか獲れないんです。だから、動物の肉を焼くことは贅沢なこと、とてもできないわけです。それで、彼らは仕方なく生肉を食べたんですけど、その情報が遺伝子に入っていて、いまだにその伝統があるし、生肉のほうが好きなんです。

中温暖帯のユーラシア大陸にあるモンゴルなんかは緑の国と言われるけど、あそこは草ばかりで、木があまりなくて貴重なんです。だから燃料は牛の糞を使う。バイオマスの完全リサイクルです。

アラスカやモンゴルの暮らしを見ていると、木や草に恵まれている我々は、草木をことさら特殊なものとして考えてないところがある

んじゃないかなと気づかされますね。観賞用の木であろうが、燃料用の木であろうが、あるいは紙パルプ用の木であろうが、木をもっと深く理解していく時代がきてるなと思います。

日本は海、川、山が正しく3つ揃った美しい国だったんですね。海に囲まれ、4万5千本の河川があって。しかもその川は全部、国有の川です。他所の国の川というのはいろんな国を経由しているの、国際河川ですよ。ですから戦争の元になるし、汚れていたりする。

でも、恵まれ過ぎていっているものは、あんまり目につかないんです。今は、蛇口をひねれば水が出てくるし、電気もあるし、飢えていないしね。世界の中では飛び抜けて恵まれているんです。でも、それを誰もが目撃前だと思っている。

恵まれることの悲しさ。恵まれることの不便さ。最近、ぼくは、そういったようなことを、もっとわかりやすく、自分の文筆活動とか話の活動の中で著したいと思っています。

時代の流れには逆らえないのでワープロ原稿が多くなりましたけど、人の息づかいとか、体温が伝わったほうがいいものは、居住まいを正して原稿用紙を使うこともまだあります。そのほうが血の通った原稿が書けるような気がするんですよ。電子文字とか携帯メールでやりとりしている文化というのは、単なる記号のやりとりであって、殺伐として悲しいですね。

デジタルで処理していくものは正確な情報という意味ではいいのかもしれないけど、心がないような気がするんですよ。やはり紙に書かれた文字。紙に刷られた活字で情報を得るといことと両立していく必要があると思います。雑誌の編集長でもあるぼくは、本という紙媒体は貴重な文化資源として継承していきたいと思っています。



PROFILE

しいな まこと

1944年東京都生まれ。1979年より、小説、エッセイ、ルポ等の作家活動に入る。主な著作に『犬の系譜』（講談社）、『アド・バード』（集英社）、『黄金時代』（文藝春秋）などがある。最新刊は『らくだの話—そのほか』（本の雑誌社）、『たきびをかこんだ がらからどん』（小学館）。旅の本も数多く、モンゴルやパタゴニア、シベリアなどへの探検・冒険ものを著している。



椎名さん愛用の原稿用紙とモンブランの万年筆。現在使っている原稿用紙は3代目。2代目の原稿用紙は作家として独立する際、同僚から譲別にもらったもので「椎名誠さんへ、ストアースレポ」編集部「同」の文字が印刷されている。

環境・社会活動カレンダー【2007年7月～9月】

- 8月27日 トプカプ宮殿の至宝展「障害のある方々のための鑑賞会」にボランティア参加
- 9月13日 当社社有林で行われている「シラネアオイを守る会」の清掃活動に参加
- 9月26日 石岡加工株式会社が、本年度の印刷産業環境優良工場表彰で「経済産業省商務情報政策局長賞」を受賞
- 9月29～30日 自然環境教室「丸沼高原 森と紙のなかよし学校」を開催

TOPIC

日本紙パックグループの石岡加工株式会社が、2007年度の印刷産業環境優良工場表彰で、栄えある「経済産業省商務情報政策局長賞」を受賞しました。2007年度で6回目を迎えるこの表彰制度は、印刷産業界における環境問題に対する取り組みを促進し、印刷工場での環境改善を目指して2002年に創設されました。



編集後記

今号を作成していた9月末、環境に関する最先端の技術を開発している財団法人地球環境産業機構 (RITE) と日本製紙の研究チームが「乾燥や塩害で荒れ果てた荒地でも育つ樹木の育種に着手した」という記事が日本経済新聞 (9/20) に掲載されました。今回の研究では、当社がオーストラリア西部の植林地から選抜した乾燥に強い木について、その乾燥に強い仕組みを解明し、乾燥に強い樹木を育てるのに役立てていくとのこと。深刻な砂漠化問題や温暖化問題の解決だけでなく、失われた緑を砂漠に取り戻しそこに生物が戻ってくればまさに生物多様性の保全にも一役買うことができ、その成果が期待されます。



グリーン・プロポーション®

お問い合わせ先 株式会社日本製紙グループ本社 CSR室 〒100-0006 東京都千代田区有楽町1-12-1 (新有楽町ビル)
TEL: 03-3218-9321 FAX: 03-3216-1366
ホームページ <http://www.np-g.com/inquire/> (お問い合わせ) <http://www.np-g.com/appliform/> (資料請求)



みんなで止めよう温暖化

チーム・マイナス6%